

## 日本臨床教育学会 第12回研究大会開催要項 (第2次案内)

### 1. 大会日程

\* 理事会：2022年10月14日(金) 16:30~19:00

\* 1日目：10月15日(土)

	9:30	10:00		12:00	13:00		15:00	15:10		17:40
受付	自由研究発表(A) 一般研究		休憩	課題研究 I・II・III・IV		休憩	シンポジウムI 現地会場企画			

\* 情報交換会は開催いたしません。

\* 2日目：10月16日(日)

	9:00	9:30	10:10	10:30		12:30	13:30		15:30
受付	総会	休憩	シンポジウムII 学会企画		休憩	自由研究発表(B) 実践事例研究			

### 2. 大会会場・配信会場 ※ 現地・オンラインのどちらでも参加可能です

\* 会場：立命館大学 朱雀キャンパス (京都市中京区西ノ京朱雀町1、JR二条駅下車)



## いま「臨床教育学」とは何かを探究し合う大会に

庄井 良信（日本臨床教育学会会長、藤女子大学教授）

日本臨床教育学会第12回大会が、京都の立命館大学を会場に開催されます。今年は会場校での対面とオンラインのハイブリッド形式での開催になります。対面方式の場でも、WEB上の場でも、臨床教育学らしく、身体性と「顔」(visage)をもって他者を感じ合い、聴き合い、語り合い、ゆっくりと希望を紡ぎ合う大会になることを願っています。現地でお目にかかれる方々も、WEB上でお会いできる方々も、ともに臨床の「場」(topos)を共有し、かけがえのない発表や提案を傾聴し、自分の心と身体にそっと触れ、知的好奇心を温めながら、学問としての臨床教育学と一緒に探索していく大会にしたいと思います。

今年も、私たちはコロナ感染症の蔓延を経験しています。国連憲章違反、国際人道法違反と断ぜざるを得ないロシアによるウクライナ侵略も経験しています。戦後、私たちが大切に育ててきた平和と民主主義が大きな危機に曝されているのではないかと思う出来事も数多く経験しています。こうした状況の中で、子どもの尊い「いのち」も危機にさらされ続けています。子どもの「いのち」をケアし、育む大人（教師を含む発達援助職の人びと）の生活も、日々、危機に直面しています。そのような危機のなか、ケアと教育を担う研究者と実践者が、一人の人間としてその「弱さ」を慈しみ合いながら、その良心と叡智を磨き合う学術研究の場として、日本臨床教育学会が設立されました。

繰り返される「危機」と多忙のなか、今回の大会開催に向けてご準備いただいた、会場校の立命館大学（京都）の皆様、大会現地実行委員会の皆様、そして学会事務局の皆様に、心から感謝申し上げます。この大会では、臨床教育学とは何か、という根本的な問いをシンポジウムで探究したいと思います。現地の特色を生かしたシンポジウム企画もあります。さらに課題研究、自由研究でも魅力的なテーマが数多く準備されています。ぜひ、この第12回大会（開催校：立命館大学）に、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

## 3年ぶりの対面開催 —京都で再会を—

春日井 敏之（現地実行委員長、立命館大学教授）

第12回研究大会（京都大会）は、立命館大学朱雀キャンパスを会場に、対面形式を基本として開催されます。コロナの感染状況なども勘案し、オンラインでの参加も可能となっています。困難な状況にもかかわらず、報告は一般研究・実践事例研究21本、課題研究では10本にのぼっています。また、シンポジウムは、I 現地企画「コロナ時代と対人援助職の専門性を問う—学校・家庭・教師をつなげる—」、II 学会企画「臨床教育学のこれまでとこれから—学会活動の12年をふり返って—」の2つが予定されています。

コロナ時代が3年目を迎えるなかで、我慢を強いられ、つながって生きる機会を削がれてきたコロナ禍の影響に加えて、ロシアによるウクライナ侵略の状況に日々触れながら、心を痛めている子どもたちも少なくありません。同様に出会いや交流の機会削がれ、また国内外の平和や民主主義をめぐる諸問題に心を痛めているのは、子どもたちだけではなく、私たち大人も同様です。子どもの課題を社会構造のなかで捉えること、個々の子ども理解を深めること、対話的・共感的なかわりと姿勢を大切にすること、対人援助・発達援助職の個としての成長と連携のあり方などについて、実践・研究報告を通して議論を深めていきましょう。そのことが、私たちが構築してきた臨床教育学のこれまでとこれからのについて、議論を深めていくことになるのではないのでしょうか。

3年ぶりの対面開催、オンライン参加を含めて初秋の京都で再会しましょう。

### 3. 共催

立命館大学大学院 教職研究科

### 4. 大会実行委員会

実行委員長 春日井 敏之  
副実行委員長 山岡 雅博  
事務局長 伊田 勝憲

実行委員	山内 清郎	中妻 雅彦	吉益 敏文	長谷 範子
	恩庄 澄	浦島 清一	山本 衛	大城 良仁
	田村 祥太郎	中村 弘志	坂井 辰美	竹田 孔徳
	細川 典敬	平尾 隼	馬場 思帆	上野 良
	橋本 彩	坂本 萌	藤本 蒼生	藤田 早苗
	池本 優香	白神 ひかり	植田 亜理沙	

### 5. 開催方法

- \* 現在のところ、立命館大学朱雀キャンパスを会場に対面での開催を基本としています。しかしながら、コロナ感染の状況も流動的であるため、zoomによるオンライン参加も可能な体制を取っています。
- \* 参加申し込み時には、どちらかの参加方法を選択してください。決済後の参加方法（現地参加／zoom参加）の変更については、現地事務局【伊田 (idak@fc.ritsumei.ac.jp)】に連絡、相談してください。
- \* なお、新型コロナウイルス感染症対策等により、現地での開催が制限される状況が生じた場合には、現地参加の申し込みをzoom参加に振り替えたり、zoom参加から現地参加への変更をお断りしたりすることがあります。

### 6. 大会参加費

- \* 大会参加費は、下記の通りです。  
一般：5,000円 学生・院生：2,000円（現地参加もオンライン参加も同額です。）
- \* キャンセルされた場合の返金はいたしません。大会運営費とさせていただきます。
- \* 大会には、会員以外の方でも、上記の参加費でご参加いただけます。

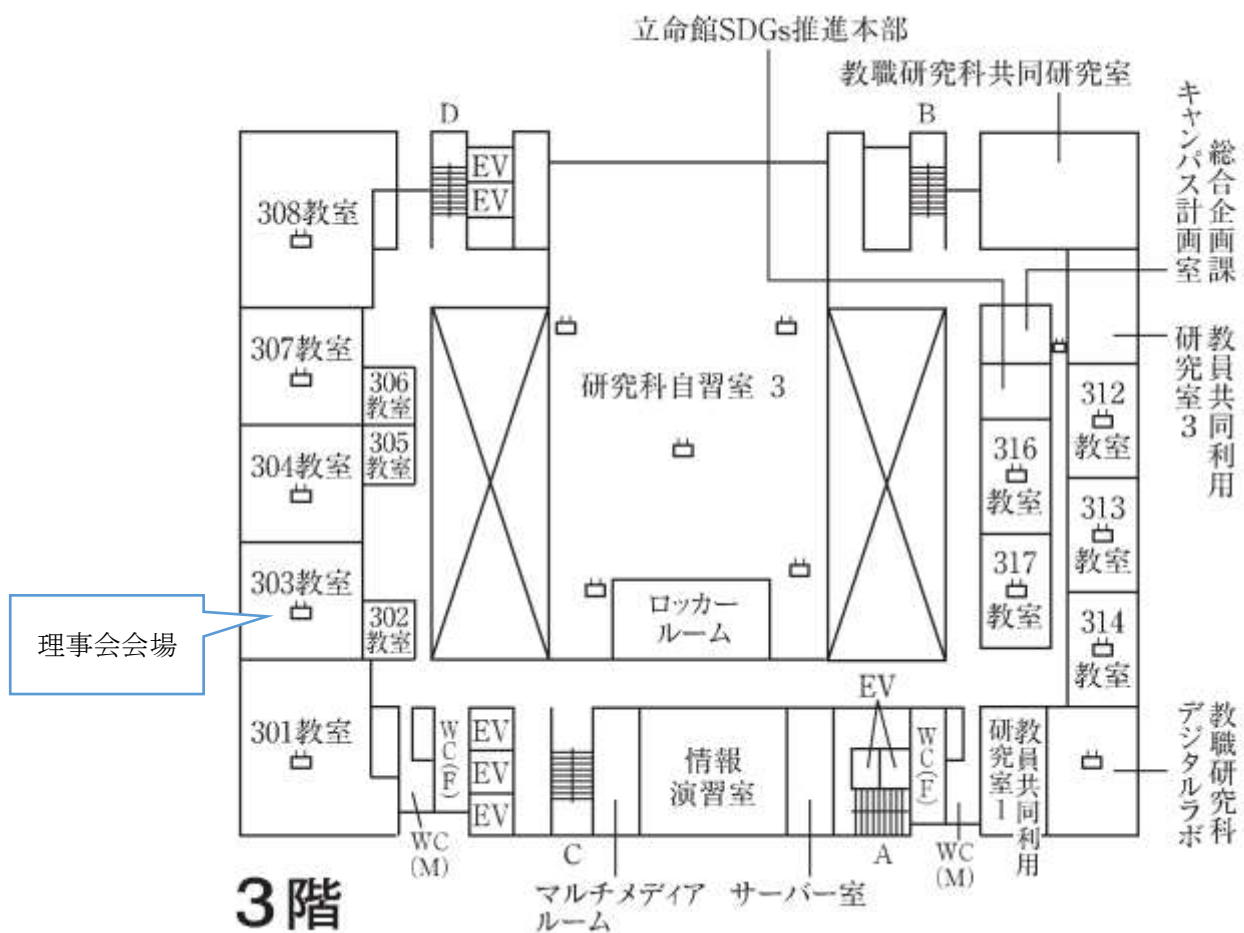
### 7. 参加申し込みについて

- \* 大会参加に関しては、事前申し込み制のみとさせていただきます。
- \* 申し込み期間：2022年6月16日（木）～10月7日（金）
- \* なお、現地参加の場合、宿泊、昼食に関しては、各自で対応をお願い致します。大学周辺には、昼食場所、コンビニ等があります。

- \* 大会参加の申し込みと参加費の入金は、イベント管理ツール「Peatix」にて行います。  
申し込みの時に、現地参加かオンライン参加かを選択して、チケットを購入（申込）してください。
- \* 「発表要旨集録」は事前申し込みのあった方のメールにデータで添付してお送りします。
- \* 「Peatix」による申し込み方法は、別添資料をご参照ください。

## 8. 大会会場一覧

10月14日（金）：理事会（16時30分～19時） 3階 303



10月15日(土): 自由研究発表(A) 一般研究(10時~12時) 3階

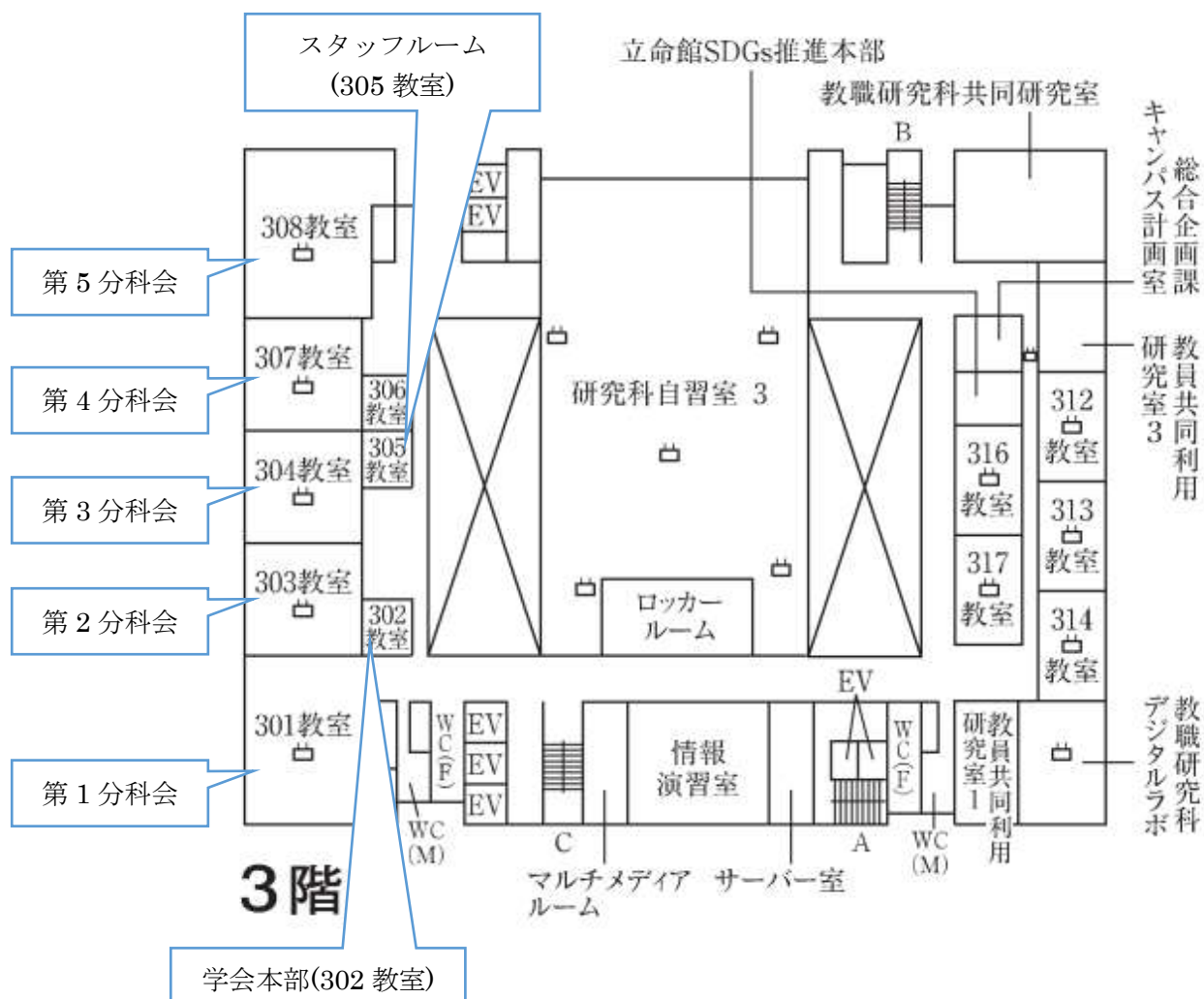
第1分科会 3階 301

第2分科会 3階 303

第3分科会 3階 304

第4分科会 3階 307

第5分科会 3階 308



※ 304 教室は、研究発表が終わり次第(12時~) 会員休憩室となります。

※ 昼食は会員休憩室、及び各教室でとっていただいで結構です。

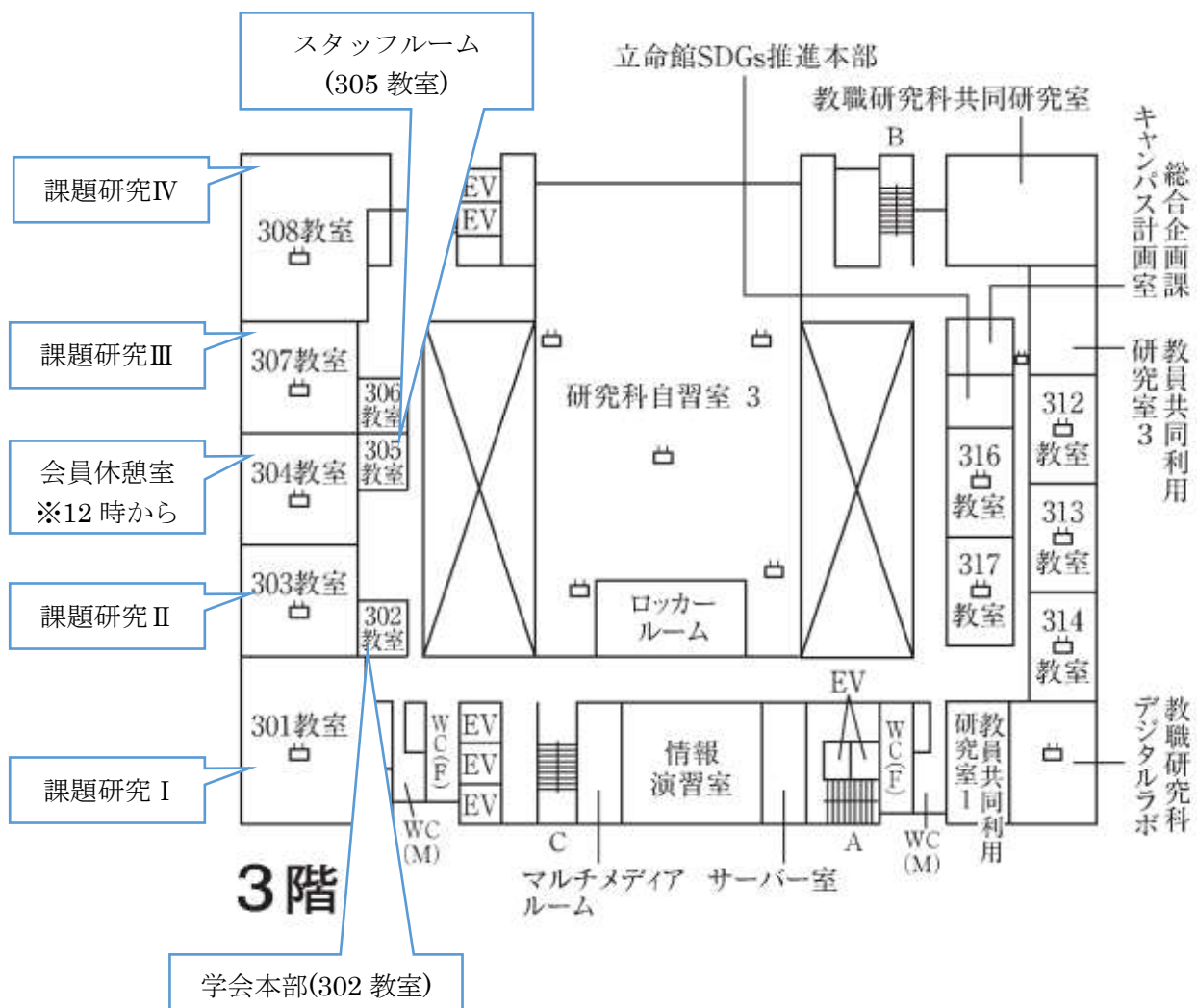
10月15日(土)：課題研究(13時～15時) 3階

課題研究Ⅰ 3階 301

課題研究Ⅱ 3階 303

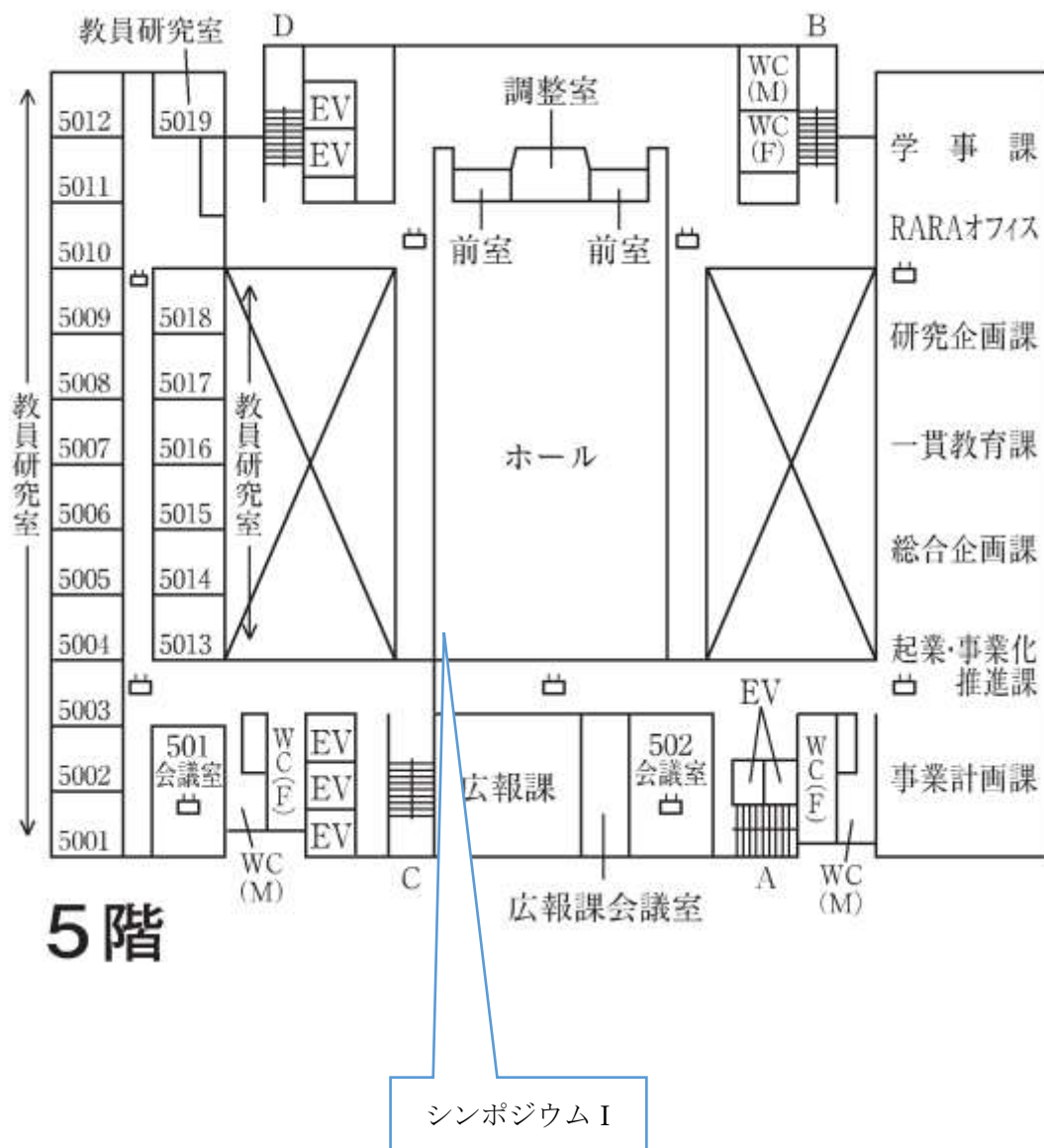
課題研究Ⅲ 3階 307

課題研究Ⅳ 3階 308



※ 昼食は会員休憩室、及び各教室でとっていただいで結構です。

10月15日(土): 現地企画シンポジウムI (15時10分~17時40分)  
5階 ホール

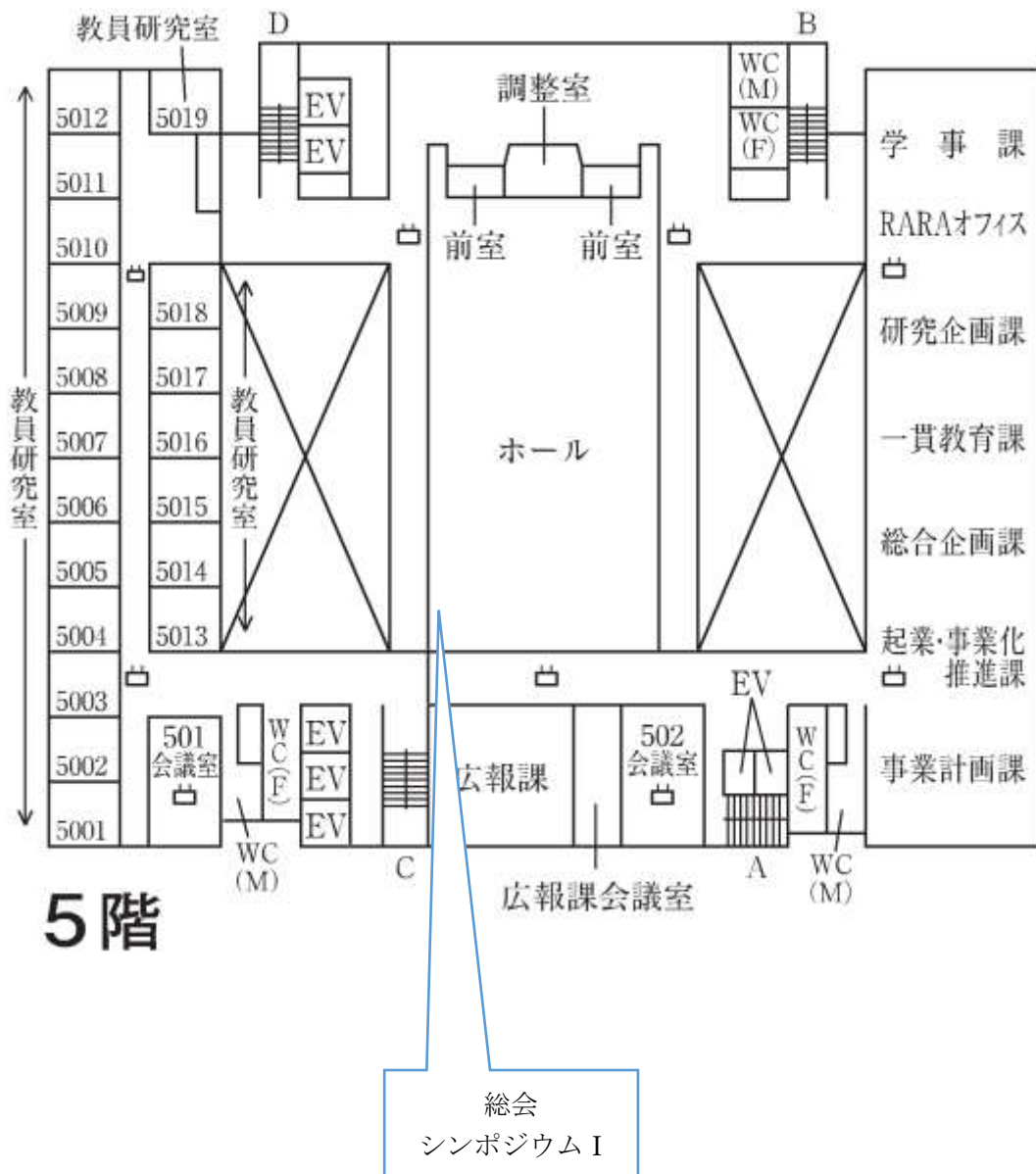


※ 本部は3階302教室、スタッフルームは3階305教室です。

※ 会員休憩室として3階304教室が使用できます。

※ 昼食は会員休憩室、及び各教室でとっていただいで結構です。

10月16日(日)：総会・学会企画シンポジウムⅡ(9時30分～12時30分)  
5階 ホール



※ 本部は3階302教室、スタッフルームは3階305教室です。

※ 会員休憩室として3階304教室が使用できます。

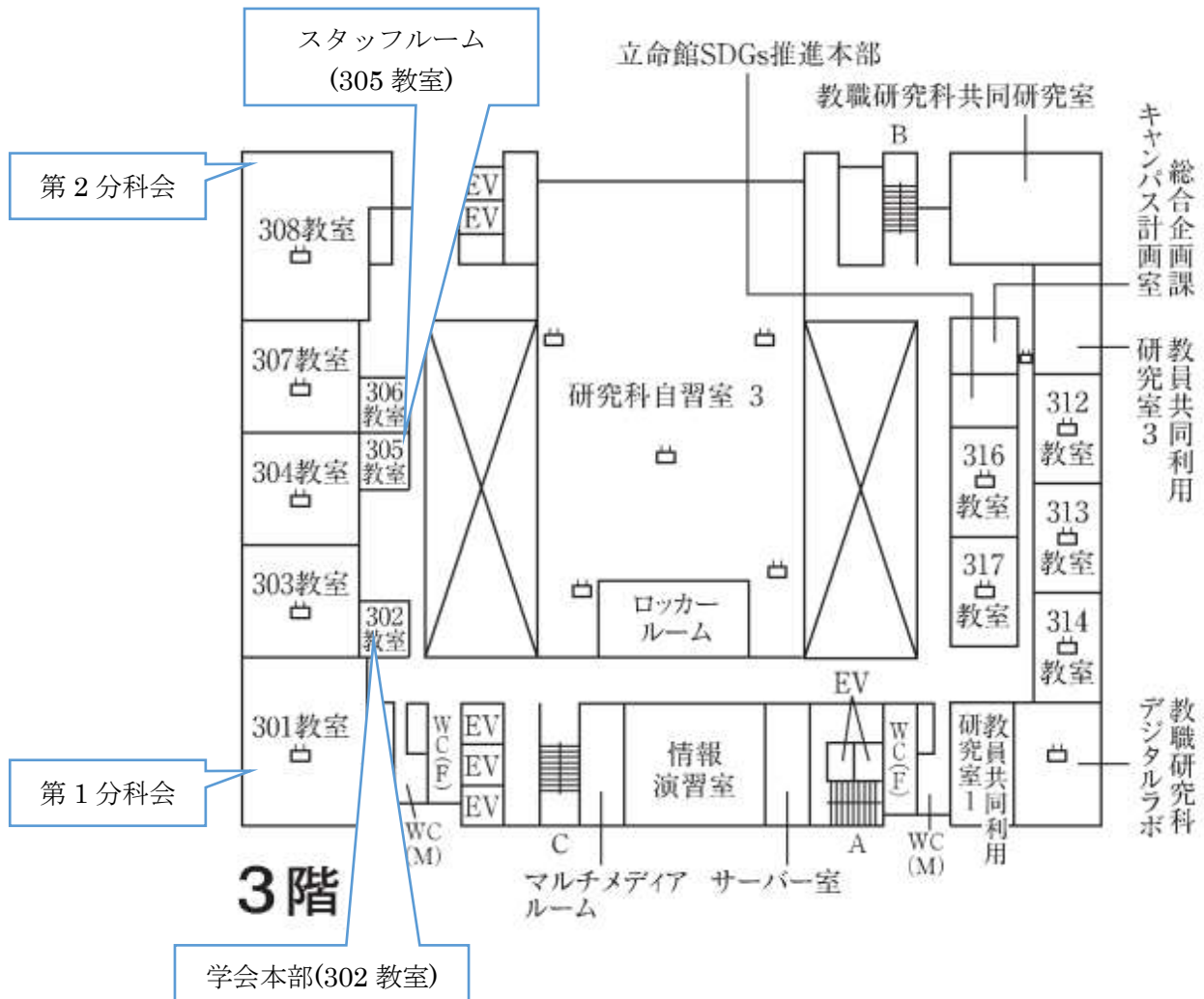
※ 昼食は会員休憩室、及び各教室でとっていただいで結構です。



10月16日(日): 実践事例研究 (13時30分~15時30分)

第1分科会 3階 301

第2分科会 3階 308



※ 昼食は会員休憩室、及び各教室でとっていただいで結構です。

## 9. 発表・提案に関するお願い

### 【参加される皆様へ】

- 1) 発表要旨集録は大会の1週間前までに、司会者・発表者・参加申し込みをされた方々にメールで配布いたします。司会者の皆様には、上記日程よりも前に、担当される分科会の発表要旨または発表要旨集録をお送りいたします。
- 2) Zoomの利用時に、登録氏名が異なる場合があります。その際は、ご本人の氏名に変更してください。
- 3) 発表中、司会者・発表者以外の参加者は、Zoomのビデオ及びマイクをオフ（ミュート）にしてください。インターネット回線の負担軽減が目的ですので、ご理解をお願いします。なお、会場によって司会者からオン・オフの指示がある場合は、ご協力いただければ幸いです。
- 4) 質疑応答においてご発言される方は、ビデオとマイクをオンにしてください。
- 5) 自由研究発表・課題研究においては、「ブレイクアウトルーム」機能を用いて分科会場を設定します。はじめに、司会者・発表者を優先的に振り分け、事前打ち合わせをしていただきます。参加者は、開始時間の5分前を目安に、参加したい分科会选择、会場を移動してください。移動方法がわからないときは、事務局がサポートいたします。

### 【会場の移動方法】

- ① 移動する際は、画面上のこのマークをクリックすれば、開設中の会場を選択する画面が開きます。



- ② 参加したい会場の横にある「参加」をクリックすれば、希望の会場に遷移します。



\*発表中も移動することは可能です。移動方法は、上記と同様です。

**【注意】会場（ブレイクアウトルーム）の自由選択は、アプリケーションのバージョンが古いと機能しないため、あらかじめ最新版のアップデートをお願いします。**

- 6) 「ブレイクアウトルーム」を開設している間は、会場担当がそれぞれの分科会に参加しています。問題が生じた場合は会場担当者、あるいはメインルームの担当者にお伝えください。
- 7) 自由研究発表・課題研究においては、討議が終わりましたら、会場ごとに休憩あるいは解散とします。終了後、Zoom参加の方は、そのまま退出してください。
- 8) 発表に際しては、Zoomの「画面共有」が有効となっています。発表要旨集録以外の提示資料がありましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。  
なお、発表または提案においては、日本臨床教育学会の〈倫理規程〉を遵守してください。特に、個人情報の保護を徹底してください。

#### 【司会者・発表者の皆様へ】

- 1) 「自由研究発表(A) 一般研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月15日(土) 9:40に各会場に集まるか、Zoomにアクセスしてください。開始5分前までに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。  
各発表につき、発表時間20分、質疑応答5分です。全発表の終了後、編成された部会ごとに20分程度の全体討議を設けます。
- 2) 「自由研究発表(B) 実践事例研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月16日(日) 13:10に各会場に集まるか、Zoomにアクセスしてください。開始5分前までに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。  
各発表につき、発表時間40分、質疑応答20分です。全体討議は設けませんが、残り時間があれば、行っても差し支えありません。
- 3) 課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者の皆様は、それぞれの開始時間15分前までに各会場に集まるか、Zoomにアクセスしてください。  
課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者のうち、Zoomで参加される方は、直前の打ち合わせにおいてブレイクアウトルームを設定することがあります。その際は、担当の指示に従っていただきますようお願いいたします。
- 4) 発表に際しては、Zoomの「画面共有」が有効となっています。当日提示する資料が

ありましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。なお、発表内で触れる第三者の個人情報保護を徹底してください。

**\*Zoom 参加者に対して資料配布が可能な場合は、当日チャットに添付してください。**

5) 当日提示する資料が配布可能であれば、対面参加者用に各自印刷して持参ください。

**\*自由研究発表20部、課題研究30部、シンポジウム80部。**

**\*当日パワーポイントなどで資料を提示する場合は、各会場にパソコンはありますので、USBを持参してください。**

6) 分科会記録については各会場の司会者あるいは参加者の中から担当を決めていただきますようお願いいたします。

7) 課題研究やシンポジウムにおける発表者の発表時間や提案順序につきましては、それぞれ異なりますので、各担当理事を中心に事前に確認し合っておいてください。また直前にも確認し合ってください。

## 10. プログラム

# 1日目 10月15日(土)



9:30~ 受付開始

10:00~12:00 自由研究発表(A) 一般研究

13:00~15:00 課題研究I・II・III・IV

15:10~17:40 シンポジウムI (現地会場企画)



自由研究発表（A）一般研究  
10月15日（土）10：00～12：00

第1分科会

子どもを支える学習・関係の質的検討

司会：早坂 淳（長野大学）  
本田 伊克（宮城教育大学）

10：00～10：25

- \* ケアと自治的集団づくりをつなぐもの  
—学級集団における班の役割を考える—

恩庄 澄（武庫川女子大学大学院）

10：25～10：50

- \* 「学びの共同体」の学校における子どもの変化の意味  
—協働的な学びと教師のあり方—

守屋 淳（北海道大学）

10：50～11：15

- \* 学級づくりにおける修復的サークル実践の意義  
—子どもと教師の語りを通して—

田淵 久美子（活水女子大学）

11：15～11：40

- \* デジタル・シティズンシップ教育の臨床教育学的考察

朝倉 恵（藤女子大学大学院）

11：40～12：00

全体討議



自由研究発表（A）一般研究  
10月15日（土）10:00～12:00

第2分科会

臨床現場における遊びの意味

司会：高口 僚太郎（中央大学）  
根本 順子（兵庫大学）

10:00～10:25

\* Hospital Play Specialist 養成講座受講生に対する調査から見た臨床現場における「遊び」の必要性とHPSの可能性

○ 松元 圭（NPO 法人ホスピタル・プレイ協会）  
松平 千佳（静岡県立大学短期大学部）

10:25～10:50

\* ホスピタル・プレイ導入の試みから考える「遊び」と臨床教育学アプローチ  
ー「疾病」と「病い」の子どもたちー

○ 松平 千佳（静岡県立大学短期大学部）  
松元 圭（NPO 法人ホスピタル・プレイ協会）

10:50～11:10

全体討議



自由研究発表（A）一般研究  
10月15日（土）10：00～12：00

第3分科会

子ども・教師の内面へのまなざし

司会：制野 俊弘（和光大学）  
村上 呂里（琉球大学）

10：00～10：25

\* 自己中心的事業を知的探究へ向かわせる契機

～関数領域の課題解決過程における自己中心的事業に着目して～

治部 雄都（札幌市立北辰中学校）

10：25～10：50

\* 不登校児童生徒の身体性に着目した指導についての人間学的一考察

土屋 弥生（日本大学）

10：50～11：15

\* 教師の「養生」と人間形成（3）

—内なる dysharmonie を見つめる—

間宮 正幸（学校法人共育の森学園）

11：15～11：40

\* 教師を続ける要因についての一考察

—一定年退職後も教師を続ける人たちのインタビュー調査から—

内田 一樹（自由の森学園中学高等学校）

11：40～12：00

全体討議





自由研究発表（A）一般研究  
10月15日（土）10：00～12：00

第4分科会

臨床教育学と当事者理解の探究

司会：影浦 紀子（松山東雲女子大学）  
田邊 哲雄（兵庫大学）

10：00～10：25

\* 援助者の意識形成過程について

一東日本大震災・放射能汚染地域での援助者への聴きとり調査から一

上田 孝俊（武庫川女子大学）

10：25～10：50

\* 「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく

第5報 美川さんへのインタビューから

松田 康子（北海道大学教育学研究院）

10：50～11：15

\* 地域の総合的援助者としてのライフストーリー研究

～「古的存在」の臨床教育学的考察～

田中 弘美（札幌市厚別区保健福祉部健康・子ども課）

11：15～11：35

全体討議



自由研究発表（A）一般研究  
10月15日（土）10:00～12:00

第5分科会

臨床教育学を耕す思想

司会：二羽 礼（東大阪大学）  
龍崎 忠（岐阜聖徳学園大学）

10:00～10:25

\* 臨床教育における実践的な運動研究の基礎

ーボイテンディク（Buytendijk, F.J.J.）の運動思想に着目してー

○ 青山 清英（日本大学）  
土屋 弥生（日本大学）

10:25～10:50

\* 教護院における学校教育論争

ー滋賀県立淡海学園長小嶋直太郎の実践思想ー

荒木 実代（武庫川女子大学大学院）

10:50～11:15

\* 離島保育・教育における「保幼こ小」接続・連携の実態と視座

：宮古島の保育者・教師による語りの検討

宮本 雄太（福井大学大学院）


11:15～11:40

\* コロナ禍における子どもの発達危機と低学年のひらがな未習得の状況

増田 修治（白梅学園大学）

11:40～12:00

全体討議



10月15日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅰ：現代の子どもと子ども理解

**乳幼児期・家庭還元論を超えた臨床教育学的乳幼児期研究の共同構築に向けて  
第5回 思春期・青年期における自己の再形成と幼少期体験の意味**

報告1：聴き合い、語り合う関係において、ネガティブな体験と向き合う学生・院生  
—教職教育における実践的な学びを通して—

山岡 雅博（立命館大学大学院 教職研究科）

報告2：生きづらさを抱えた少年たちの自己の育ちを支える

—奈良少年刑務所における「詩の授業」の実践事例の検討から—

加藤 恵美子（大阪府公立中学校教諭）

竹下 三隆（臨床心理士、SC、元奈良少年刑務所教育専門官）


<趣旨>

これまで本課題研究では、「子ども理解における乳幼児期の位置と捉え方」について、親たちが抱える子育て不安と子育て環境をめぐる諸問題との関係、乳幼児期の体験を他者との出会いの中で捉えなおしていく過程や、そこに関わる援助者の在り方などに焦点を当て、臨床教育学的な乳幼児期研究の視点を深めてきた。昨年度は、思春期や青年期の葛藤表出に関わる実践現場での事例に基づいて、今なお根強く存在する乳幼児期還元論（母子関係還元論）を批判的に意識しつつ、子ども・青年が抱える葛藤と幼少期体験の記憶との関係について検討した。そこからは、幼少期体験を捉える際にも、原因論的な視点からの理解を超えて、子ども自身の「情動・感情を伴った内的体験に潜在する『能動性』」を示す表現を探り、それを感受すること。そのために、潜在する意味の二重性という視点に立つこと。また、そこに接近し得る援助者の姿勢と力量が問われることなどが確認された。

第5回目となる今回は、これまでの蓄積を踏まえ、①深く対話できる他者（たち）との出会いと関係の蓄積の中で、幼少期には実感できなかった「情動・感情を伴った内的体験に潜在する『能動性』」に気づいていく可能性を、具体的な事例を通して検討する。②そして幼少期の体験と記憶の捉え方が子ども・青年の中で変化し、様々な「育ちそびれ」を取り戻したり、個性に転化したりしながら複雑に成長する事実に迫りたい。③さらに事例の検討を通して、困難な過去を背負って生きる子ども・青年が心の鎧を脱いで過去に向き合うとき、そこに関わる援助者がどのような視野と姿勢でその表現を受けとめ、関係を築き上げてきたのかを丁寧に聴き取り、子ども・青年自身が過去を自己の再形成の糧にできる援助実践における援助者のあり様についても検討していきたい。

司 会：広木 克行（神戸大学名誉教授）

筒井 潤子（都留文科大学）



10月15日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅱ：子ども・若者の育ちや自立を支える地域からの共同

**高校生の居場所を学校と地域でつくる試み<居場所カフェ>から、  
子ども・若者の育ちを支える共同を考える**

報告1：堀谷 沙貴（横浜市立横浜総合高校定時制「ようこそカフェ」カフェ委員会担当）

公益財団法人よこはまユース並びに複数の若者支援団体と高校が連携して立ち上げた「ようこそカフェ」は、様々な困難を抱えた生徒たちに「つながり」と多様な「体験」を保障することを目的に活動を行っている。その取り組みの様子と活動理念を、こちらでは高校の教師の側から、経緯と日常活動とのつながりとその変容を軸に、話を聴いてみたい。

報告2：田中 俊英（一般社団法人ドーナツトーク代表）

2012年に大阪府の委託事業として西成高校から始まった「居場所カフェ」。西成高校の「反貧困学習」等の教育活動の蓄積とつながった取り組みを発展させてきた一般社団法人ドーナツトークのスタッフから話を聴いてみたい。

報告3：横井 敏郎（北海道大学）

教育科学研究会編『教育』（2020年6月号）に「高校内居場所カフェという実践」という論文を執筆した横井氏に「居場所カフェ」に関する報告を受けてコメントをお願いする。

<趣旨>


高校内に設けられた<居場所カフェ>の取り組みが全国で広がってきている。

高校における生徒への指導・支援の主流は、進路選択とその実現を目標とする日本型キャリア教育に枠づけられてきたと見ることができるであろう。そして、学校生活への「適応」が困難な生徒には、カウンセリング等の心理主義的個別対応が行われてきた。

そのような中で、通っている学校の中に、日常の延長上に気軽に参加でき、自然に表現や交流が生まれる居場所が各地で生み出されていることは興味深い。そうなっているのは、出会ったことのない教師以外の多様な経験を持つ地域の様々な人々が出入りしており、その他の学校空間の雰囲気とは異なる非日常空間であるからだろう。けれどもそれだけではなく学校にとっては、普段は見えにくい生徒が抱えている問題の相談やニーズの発見がなされ学校文化の変容を生み出すとともに、地域の支援団体にとっては、高校生と接触できる窓ともなり、その後の地域における切れ目のない包括的支援につなげる可能性を持つものである。まさに高校生の居場所を学校と地域でつくる試みである「居場所カフェ」を、「子ども・若者の育ちや自立を支える共同」という観点から検討してみたい。

司 会：富田 充保（相模女子大学）

池田 考司（北海道教育大学）



10月15日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅲ：発達援助実践と発達援助専門職

**発達援助専門職の専門性を培う自主的な学びの共同  
—「北大ワロン研究会」を手がかりに—**

報告1：発達援助職が共にH.ワロンの文献を読みあうことの意味

—すぐれた臨床教育学的研究の歴史的財産を共有し世代間継承を果たすこと—

間宮 正幸(学校法人「共育の森学園」理事長、北海道大学名誉教授)

報告2：自主的な研究会を通じてゆるやかに磨かれる発達援助専門職の私の専門性

今野 邦彦(藤女子大学)

コメント：田中 孝彦(日本臨床教育学会理事)

<趣旨>


今回の課題研究Ⅲでは、発達援助専門職の専門性への着眼点として、専門性を下支えする「学び」の継続に焦点を当てる。日本臨床教育学会では、子ども・教育に携わる発達援助専門職の専門性を問い続けてきた。本学会には、社会人大学院生として学び、そこでの学びを土台としながら、今も日常的な実践・研究を続けている人が比較的多く所属している。

しかし、大学院などを修了し、再び現場に出てからは、その学びを継続することが重たい課題となることがある。日々の問題関心が「学び」に還元されないこともあるだろう。カリキュラムや学位取得という枠組み・目的は、学習環境として重要なものであるが、その有無に関わらない「自主的な学び」の継続も、専門性を磨くためには必要である。このことは、生涯にわたる自己教育を重視する臨床教育学の課題としてとらえるべきである。例えば、大学院でのゼミナールの学習や演習は、参加者の問題関心や子ども像・援助者像を媒介としながら、各々の専門性を耕す土壌となり得る。しかし、本当の意味での専門性の養成を考えるならば、限られた期間の学びの保障ではなく、継続的な学びの保障、それを可能とする学び合いの機会について考える必要がある。

今日において、自主的で継続的な学び合いの機会をもつのは容易ではないが、「北大ワロン研究会」は、そのような学び合いを継続してきた。そこでの議論は、ワロンの文献読解だけでなく、発達援助専門職としての問いの交流や、現場で接する人々に対する再解釈をうながしているようにも思う。さらには、ワロンの豊かな研究知見が、参加者の子ども理解・人間理解を一層刺激しているのだろう。

あらゆる分野において、「コロナ禍」あるいは「コロナ禍」以降の共同のあり方が問われているが、今だからこそ、発達援助専門職の専門性が培われるための学びと共同を参加者とともに考えてみたい。

司 会：渡邊 由之(東大阪大学)



10月15日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅳ：教師の専門性の再検討

**対人援助職としての教師の専門性を問い直す  
—教育課題への実践と校内研修のあり方—**

報告1：令和の日本型学校教育を担う教師の在り方特別部会の審議まとめについて

福井 雅英（滋賀県立大学）

報告2：コロナ感染症について考える授業と子どもたち

村越 含博（北海道文教大学）

報告3：教師の専門性を高める校内研修会と教育実践

早久間 学（滋賀県近江八幡市立馬淵小学校）


<趣旨>

新学習指導要領の実施と連動して、中央教育審議会から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（2021）が出された。これを受けて、「令和の日本型学校教育を担う教師の在り方特別部会が設置され、「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて 審議まとめ」（2021）が公表されている。教員の養成、採用、研修を一体的に捉え、特に教員免許更新制度の廃止に伴う教師の学び、研修について提言がなされている。こうした教育政策の動向をどう捉えていけばよいのか。批判的な検討に留まらず、対人援助職としての教師の専門性について、私たちの実践を通して明らかにしていく意義は、より高まっている。

今次の課題研究では、①この間の政策動向の検討、②コロナ時代が3年目を迎えるなかで生じている学校・家庭・地域等における様々な課題を踏まえた教育実践のあり方、③対人援助職としての教師の専門性を高めるための校内研修のあり方を論点にして、報告と議論を深めたいと考えている。

司 会：春日井 敏之（立命館大学）

福井 雅英（滋賀県立大学）



10月15日(土) 15:10~17:40

シンポジウムⅠ：現地会場企画

**コロナ時代と対人援助職の専門性を問う  
—学校・家庭・教師をつなげる—**

パネリスト：石塚 かおる（児童養護施設つばさ園）  
幸重 忠孝（こどもソーシャルワークセンター）  
福本 早穂（親子支援ネットワークあんだんて）  
春日井 敏之（立命館大学大学院教職研究科）

コーディネーター：山内 清郎（立命館大学文学部）

〈趣旨〉

コロナ禍で子ども・青年及び若い女性の自殺者数が急増した。コロナ以前から、学校では暴力行為やいじめ、不登校は増え続けており、子どもたちは様々な問題や生きづらさを抱え、家庭生活における虐待相談件数も伸び続けている。また、子どもの貧困率やシングルマザーの生活困窮問題なども改善されることなく、経済格差やジェンダーなどの構造的・文化的暴力が社会的弱者を苛んできた。コロナ禍で様々なコミュニケーションが分断され、子どもたちや社会的弱者は孤立しやすく、様々な格差がさらに拡大してきている。

今回のパネリストは京都を中心とした関西圏で、長期間、貧困や虐待、いじめ・不登校など、子どもの命と心を守る最前線で活躍されている対人援助の専門家である。様々なフィールドから、コロナ禍の子どもたちの“今”をどのように理解し、どのような指導・支援・ケアが求められているか明らかにしていきたい。同時に、地域における子どもたちを守り育てるネットワークの可能性をも探していきたい。さらに、立命館大学大学院教職研究科（教職大学院）では、今回のパネリストの所属する施設・団体にフィールドワークやゲストスピーカーなど、院生の学びのフィールドとしての関係も続けている。教職大学院は地域教育委員会との連携は必須とされているが、対人援助の最前線との連携も重要であろう。大学・教職大学院が教員養成における質の向上とともに、地域をつなぐネットワークの要となり得るかなどの検討も視野に入れたい。

2日目  
10月16日(日)




9:00~ 受付開始

9:30~10:10 総会

10:30~12:30 シンポジウムⅡ(学会企画)

13:30~15:30 自由研究発表(B) 実践事例研究





10月16日(日) 10:30~12:30

シンポジウムⅡ：学会企画

**臨床教育学のこれまでとこれから  
—学会活動の12年をふり返って—**

提案者：田中 孝彦（日本臨床教育学会理事）

庄井 良信（藤女子大学）

渡邊 由之（東大阪大学）

司 会：田中 昌弥（都留文科大学）

〈趣旨〉

臨床教育学とは何か。なぜ、臨床教育学が1つの学問領域として生まれたのか。この危機の時代において、臨床教育学は、どのような社会的役割を果たしていくのか。これらは、臨床教育学が学術研究として展開していく際に不可欠の問いである。この問いを深く探究するためには、本学会設立の原点に立ち返り、今日における国際的な研究環境を視野に入れ、現代思想における位置を探究する必要がある。つまり、臨床教育学という学問領域の生成と展開に埋め込まれた「思想と方法」に関するダイアログと熟考が必要である。

これまでの12年間、臨床教育学では、以下のような「問い」が探究されてきた。それは、身体性をもって「被る」（こうむる）体験を生きる意味とは何か。危機を生きる、喪失を生きる、弱さを生きる意味とは何か。他者の当事者としての声を聴き、語り合い、そこから仄見える希望を探索する意味とは何か、などである。これらは、他者の生活世界に触れ、他者の尊厳ある「声」を聴き、そこから新たな物語（ナラティブ）を紡ぎ合う多声楽的なコミュニティを再生する実践の中で深められてきた。

本シンポジウムでは、学会設立の12年間と、設立に至るまでの議論をふりかえり、次の3つの観点から、臨床教育学のこれまでの足跡とこれからの展望について検討したい。1つは、そもそも学術研究としての臨床教育学とは何か、その萌芽はどこにあったのか、その思想としての展開の必然性はどこにあったのか、という観点である。2つは、臨床教育学が、固有な学術研究に相応しい方法として探究してきた方法意識とは何であったのか、という観点である。3つは、複雑な社会状況の中で、いま、臨床教育学が果たすべき社会的・政策的な応答責任とは何か、という観点である。シンポジウムでは、これらの観点を重層的に意識しながら、ケアと発達援助の専門性を高め合う学術研究としての羅針盤を明らかにしていきたい。



自由研究発表（B）実践事例研究  
10月16日（日）13：30～15：30

第1分科会

子ども・若者の生存・学習を支える

司会：井上 大樹（札幌学院大学）  
長谷 範子（花園大学）

13：30～14：30

\* 学生理解の手立てとしての「学科通信」についての考察

田崎 由子（大阪綴方の会）

14：30～15：30

\* 生活困難を抱える高校生徒への支援

～自分の困り感の表明を支援するためのSC、教員との協働について～

村澤 博美（公立高校スクールカウンセラー）



自由研究発表（B）実践事例研究  
10月16日（日）13：30～15：30

第2分科会

多様な生き方を支える援助実践

司会：早川 りか（武庫川女子大学）  
吉岡 眞知子（東大阪大学）

13：30～14：30

\* 病院内教育実践におけるナラティブの重要性と教師の役割について  
—作品展「東京の病弱教育の主人公たち」の取り組みを通して—

- 齊藤 淑子（全国病弱教育研究会 都留文科大学）
- 佐藤 比呂二（全国病弱教育研究会 都留文科大学）

14：30～15：30

\* 婦人保護施設における性・ジェンダーに関する職員の認識と支援の課題

- 林 久美子（大阪府立女性自立支援センター）
- 引地 綾（大阪府立女性自立支援センター）



**【第12回研究大会に関する問い合わせ先】**

〒577-8567 東大阪市西堤学園町 3-1-1  
東大阪大学 渡邊由之研究室  
日本臨床教育学会事務局  
E-mail : [crohde2011@yahoo.co.jp](mailto:crohde2011@yahoo.co.jp)